第4章

異文化間カウンセリングにおけるPAC分析

異文化間カウンセリングにおいて、クライエントの心理アセスメント（測定）をすることについては、第2章で述べたように、(1)文化差の問題、(2)コミュニケーションの手段としての言語による意志疎通の困難の問題、(3)発達的視点の問題の3つの問題を考慮しなくてはいけない。

カウンセリングにおけるアセスメントの役割について村瀬（1965）は、いわゆる鑑別・診断的に利用するのではなく、発達援助的立場からクライエントの共感的理解への手段としての使用を提唱し、投影法の意義を論じている。村瀬（1965）の臨床事例はロールシャッハ検査によるものであった。本書では、第3章の事例において、ロールシャッハ法による発達援助的な投影法アセスメントの意義を、異文化間カウンセリングにおいて明らかにした。

本章では、PAC分析（内藤、1993 a、1994 a、1997）の手法を取り上げ、カウンセリングにおける発達援助の有効な道具として、異文化間カウンセリングで活用可能かどうかを検討する。

1　はじめに

1-1　PAC分析（個人別態度構造分析）とは

内藤（1994 a）は、PAC分析について、次のように特徴づけている。「被験

者1名のみにより、ただ1度の測定で、しかも独立の尺度次元を想定せずに、態度の全体構造を分析する技法の開発が望まれる。これまでの諸技法で扱われてきた、態度対象となる概念（コンセプト）項目群及び尺度項目群に相当するものの双方をとりあげること、しかもそれらが個人特有なものであること、すべての項目群全体を用いて構造を抽出することが望まれる。ここには平均値も分散もない。また、数量的に測定し、分析できたとしても、個人独自の構造を他者がどのようにして解釈することができるかという問題がある。これらの基準を満たし、個人独自の質的かつ量的な分析を可能とする技法として、また方法論として提唱されたのが、PAC分析である」。

PAC分析自体は臨床的診断法として開発されたものではない。しかし、個人の内面の構造を明らかにする手法として、投影法などの臨床診断法と共通する優れた特徴がある。また、クライエントの気づきを促す発達援助的効果も期待できる。

個人の内面を明らかにするという点で言えば、例えば内藤（1994 b、1995 b）は青年の性の欲求という自己開示しにくい問題を、被験者に対する現象学的な理解に基づいて、しかも検査結果を話題にして対話によって交流しながら具体的・構造的に明らかにしている。PAC分析の詳しい手続きは、内藤（1994、1997）、その成立過程については述べたものには、内藤（1993 a）、その具体的な分析例については、内藤（1993 b、1994 b、1994 c、1995 a、1995 b）、渡辺・安・内藤（1995）を参照するとよい。

1-2　PAC分析を異文化間カウンセリングに用いる意味

内藤（1993 a）はPAC分析を臨床の実践に活用できるポイントとして、次の14の特徴を列挙している。各々を紹介しながら、留学生理解のための研究方法としての観点から、コメントを加えていこう。

(1-1)　ただ1名の被験者に対して、ただ1度の測定だけで、その人独自の態

度構造を分析することができる。

これはPAC分析の基本的特徴といえる。1対1のカウンセリング場面で応用できる手法である。本章では留学生を対象とした応用例を1事例紹介する。

(1-2)　とりあげる被験者が自由連想できる対象でありさえすれば、あらかじめ尺度構成する必要もなく、繰り返し測定する必要もなく、あらゆる態度対象の構造分析に適用できる。いわば、各種の心理テストを入れた引出しを背にすることなく、あらゆる臨床問題についてすぐその場で測定し、分析することが可能である。

PAC分析では、具体的な刺激語の自由連想から出発しており、その場合の反応語が何語であろうが実施できるものである。留学生にとっては、検査や調査の教示や内容の言語的理解がしばしば困難であり、実施不可能なものも多い。この点では、PAC分析は（課題理解の上で多少の困難を示す被験者もいたが)、日本語初級者であっても課題の理解が容易であり、実施可能であると思われる。

(1-3)　心理テストなどと違い、現象や問題そのものに焦点を当てて変数を収集し、その構造を分析する事ができる。

留学生個人の適応問題を研究するにあたって、その問題は具体的かつ多様であり、一律に心理テストによるクライエント理解をすることが、困難であるとの印象を筆者らは常々抱いて来た。この点PAC分析では、直接当該の被験者が直面している問題にアプローチすることができる。

本章では留学生にとって、重要な位置を占める授業について、その個人的イメージを理解する手段として応用した例を紹介する。

(1-4)　自由連想を利用することから、当該の被験者自身にとつて意味をもつ、また、重要な対象をとりあげることができる。

このPAC分析の特長は、特に多様な文化的背景を持ち、こちら側の想像も

つかないような意味世界を持っている留学生という「異文化的」な相手を理解するために重要なのである。

(1-5)　自由連想を用いるため、被験者自身が意識化していない無意識（少なくとも前意識）の部分に関わる項目を得ることができる。

被験者が自分では気づいていない真の問題を気づかせる、いわゆるフォーカシング（焦点のあてかたの技法；Ivey, 1983/1994）を進める上で有力な手段となる（内藤、1996）。PAC分析を行うことにより、被験者の「気づき」を促すばかりでなく、研究者側にとってもそのような「気づき」を得られる機会となる。

(1-6)　象徴的なイメージのつながりを示唆する連想的意味、暗い・暖かいなど情緒的な意味、辞書的に説明するような外延的意味、のいずれも出現し、人や対象によってそれぞれの比重が違うとみなせる。また、表現の形式は単語、熟語、文章、受動的、能動的、というように多彩であり、これらの表現様式自体によって、臨床的に意味のある解釈を引き出すことができる。

言語的背景の異なる留学生に日本語ないし他のイメージ反応を求めた、我々の予備的調査では、時には単語ばかりだったり、あるいは会話体であったりして、その反応は実に多様であることが確認された。これは被験者に自由度を持たせたPAC分析の長所である。筆者らは表現形式と意味的世界の間の対応について未だ充分な考察を行っていないが、日本語能力の発達との関係でこのことを追求していくと、異文化適応過程について有力な知見が得られるかもしれない。

(1-7)　結果を被験者自身に解釈させることで、研究者や臨床家が解釈できない独自な構造を解釈できる。裏面からみれば、現象学的データ解釈技法を用いなければ了解できないほどの、個人に固有な連想項目とその構造

を分析していることになる。

PAC分析のこのような、相互作用的分析プロセスは、被験者自身の活動と解釈を重視している。相手個人を知り、働きかける上で、このような相互作用による他者と自己の理解のプロセスが、研究者による被験者理解にとっても重要である。

(1-8)　カウンセリングなどで面接を数回繰り返すことで得られる分析成果を、ただ1度の測定と解釈をさせることですみ、時間的効率が飛躍的に向上する。

実際に被験者が心を開いて自分の態度を自己開示するまでの時間は（個人差も大きいが）予測がつかない。PAC分析によってこの問題が改善されることが期待される。カウンセリング的な観点からいっても、我々の予備的研究では、PAC分析をおこなうことにより、被験者の持つ問題をより的確にとらえることのできた事例があった。

(1-9)　技法化されているために、簡単な訓練で利用可能である。

確かに、実施に至るまでの訓練期間は、ロールシャッハ等の他の心理テストに比べ短い。ただし、了解心理学的解釈の場では、臨床的なセンスが問われる。そのためには充分な臨床的研鑽が必要なのであろう。

(1-10)　数量的処理を含めて、操作的手続きによって構造分析と解釈をするために、研究者や臨床家の理論的立場による影響が少ない。また、研究者や臨床家の主観によって構造分析や解釈が歪む可能性が少ない。

クラスター分析は、結果が一義的な構造となって出てくる。しかし、グループ化のレベルでは自由な裁量も残されている。本章では、一つの試みとしてMDS（多次元尺度法；Shepard *et al*. 1972/1976、高根、1980）を使った解釈をおこなった。

MDSは、項目間の距離の行列を基に、その関係をn次元の空間に表す手法

である。本章では、連想語を2次元平面に配置し、それを被験者に解釈させた。この方法の利点は、(1)平面上のユークリッド距離として視覚的に容易に被験者に把握されやすい、(2)直感的・空間的・非言語的にグループ化ができ、被験者の納得のいく分類が可能、(3)分析手法によって異なった結果が得られるという不安定さがない、という特長がある。特に留学生では、クラスター分析のデンドログラム（樹形図）の解釈をより深める際にMDS平面図が有効なときがあった。クラスター分析の補助的手段としてMDSは有効な手段であることを確かめることができた。特に言語的コミュニケーションが困難な場合では、クラスター分析のデンドログラムのトポロジー空間的特徴よりも、MDSのユークリッド平面的表現の方が、類似度の把握と解釈が行いやすいようであった。

(1-11)　連想項目間の類似度を評定させるという簡便な手続きだけで、測定時点での被験者の態度構造を抽出できる。

類似度の評定は留学生にとっても困難な課題ではない。留学生の適応研究に有効である。手続きの簡便さは、言語や文化の異なる留学生を相手にした場合にも重要な要素である。

(1-12)　大型計算機は必要なく、市販の統計ソフトを入力したノート型パソコンと簡単なプリンターさえ携帯すれば、いつでもどこでも分析可能である。

筆者らはパソコンを使って、統計パッケージSPSS for Windowsによりクラスター分析と多次元尺度法を行った。

(1-13)　技法を理解し、練習すれば、被験者自身が単独で分析できる。これにより、他者に知られたくない自己のある側面について、どのような内容かを秘かに知ることができる。

研究者の自己反省の方法としても応用が可能であろう。

(1-14)　治療者が診断・評価を試みるに際して、患者情報を意識的・意図的に分析するのが困難なとき、治療者自身が情報の構造分析として活用することが可能である。

被験者が、自らの悩みや問題を自己開示することに抵抗がある場合には、従来のカウンセリング技法に変わる方法として、PAC分析を被験者理解のために利用することはきわめて有効である。

以上のようにPAC分析は留学生を理解するための研究の方法として有効であることが示唆された。このような特徴は、異文化間カウンセリングにおいても、有用であると考えられる。とくに、日本語を話す能力と聞き取りの能力は個別カウンセリングをおこなう場合の必要条件となっている。PAC分析の場合は、クライエントが日本語未習得の場合でも以下のような特徴により、ことばのハンディを補うという利点がある。

(1)　手続きの教示が理解できれば高度な日本語の会話能力を必要としない。

(2)　初めの手続きは、イメージに対する連想語を書く作業であり、これは被験者の母語や得意とする言語（例えば英語）でおこなうことができる（ただし研究者側で、その記述内容を理解できる条件が必要である）。

(3)　反応語と反応語の間の距離（類似度）の評定でも、被験者に教示内容が理解できていれば困難な作業ではない。

(4)　教示や刺激語はどの言語でおこなわれてもかまわず、また書き言葉で行われてもかまわない。

(5)　樹状図や2次元空間図は、被験者の用いた言語で出力されるので被験者にとって理解が容易である。

(6)　しかも樹状図や二次元空間図は視覚的な解釈によるものなので言語刺激のみの出力よりも解釈が容易である。

以上のように、PAC分析は方法的な点から見ても異文化間カウンセリングに適用可能だと予測できる。

2　PAC分析の適用事例

以上のようなPAC分析の特徴を生かして、この研究法が留学生の適応研究に実際の臨床場面で応用できるかを探ることが本章の目的である。そのためには、以下に述べるように日本での予備教育課程の授業に欠席がちであり、日本人に対して否定的な態度を持っていた留学生の1事例を検討する。カウンセリング経過中に2回のPAC分析により本人個人の授業イメージをカウンセラーと共有する過程で、治療的効果が認められた。この事例により、日本語を母語としない留学生にとってPAC分析がカウンセリングの有効な手段として活用できることを示したい。

2-1　予備教育機関における不適応の問題

国費学部留学生の予備教育を行っている東京外国語大学留学生日本語教育センター生活指導部（1995）は、旧日本語学校開設以来1993年度入学生までの追跡調査を報告し、東京外国語大学留学生日本語教育センター（以下：センター）入学者942名中、センター中退者（15名）と大学に進学しなかった者（非進学者＝5名）が合わせて20名、国立大学の学部入学後の学部中退者が41名、合計61名の中途退学者がいることを明らかにした。

このうち、センターの予備教育課程にはいった学生のうち、大学を卒業しなかった者については、留学生の出身地域によって、中退率に著しい差があることがわかった（井上・土屋・谷、1996）。漢字圏、非漢字圏をとわず、アジア諸国では中退率が低く、南米の数値も低い。アフリカやヨーロッパについては、絶対数がまだ少ないので何ともいえないが、中退率にみられる地域差は、漢字、非漢字とか、言語のタイプ、先進国・開発途上国などの要因よりも、母国で身につけてきた学習スタイルと、日本式の教育方法との関係などによることが考えられる。

留学生の出身国の学習スタイルと日本式の教育方法（授業）の相違は、時に学業不振を招き、中途退学の遠因となることがある（センターの場合、これまでの中途退学者20名のうちの15％が学業不振のための退学者）。また、退学までには至らなくとも、深刻な不適応を招くこともある。

2-2　授業に欠席が多い男子学生の事例（A）の問題

この事例はアジア出身の男子学生で、授業の欠席率が高く、本人も心理的適応上の問題をかかえ、カウンセリングを希望してきた学生（A）である。Aは日本留学の経験を有する父親に勧められ日本留学を決めた。高学歴の両親と妹の4人家族で、15歳の頃から得意のコンピュータ関連のアルバイトをして学費にあてたという独立志向の強い学生である。

来日当初は活動的で、有志で結成されたサッカーチームに参加し、地域の高校生チームとの対抗試合などでも活躍していた。授業の出席率もかなり良く表面的には新しい環境で元気に生活しているように見えた。ただし、この間、4月と5月に相談室に2度来室している。相談内容は、「自分は来日してよく日本人から同性愛者と間違えられる。その原因は自分の態度にあるのではないか」という疑問と不安、今後自分はどのような立ち居振る舞いをすればよいかということについてであった。カウンセラーとしてはAのカルチャー・ショックへの心理的対処とともに、具体的に、日本社会における男性として望まれる態度について話しあった。6月には一応の落ち着きを見せ、7月の夏休みを迎えた。

しかし、夏休みを終えた9月はじめ頃から疲れた様子がうかがえることがあった。サッカーチームからも自然に抜けていったようであった。相談室に話に来るようにと呼びかけると救われたような表情をみせ、非定期ながらカウンセリングを再開した。相談室では、夏休み中に、町を歩いていると「○○人は国に帰れ」などという言葉を突然浴びせられるなど、日本人から受けた被差別体験について詳しく説明した。自国と自己のプライドが傷つき、日本で勉強する

気持が弱くなってきたと、来日当初からの気持の変化について語った。会話はすべて両者にとっては母語ではない英語で行われ、1学期末には見せていた“少しでも日本語で話そう”という積極的な意欲はほとんど見せなかった。また、寮の日本食は醤油の匂いと味が強くて、全く身体が受け付けないようになり、現在は自炊していると日本文化への拒否的態度を見せた。

10月・11月の授業の出席に関しては、担当教官からの報告により、理系専門基礎科目の欠席と午前中の日本語の授業への欠席の多さが確認された。カウンセリング時に授業欠席ついて尋ねると、「あの日はどうしても大使館に行く必要があったから」などと理由を主張し、欠席理由についてはきわめて警戒的な答えを繰り返した。これは、自分の被差別体験などの心理的問題については、かなり深い話をカウンセラーと共有しているのとは対照的な態度であった。また、日本政府からの経済的援助によって保証されている国費留学生という自己の立場について、「時々、乞食みたいなみじめな気持になる。反抗は許されない」と語った。

カウンセラーとしては、Aの欠席の問題には、文化差に基づく適応上の問題を内包していることを了解したが、国費留学生という本人の立場が授業欠席についての話題を回避させていると判断した。そこで、同じように授業に欠席がちの学生を集めてグループ・カウンセリングを行うこととした。

2-3　授業に欠席がちな学生を集めてのグループ・カウンセリング

入学当初からの欠席率を調べたところ、53名中9名（男性5名、女性4名）の学生に欠席率の高さが認められた。授業への参加についての問題を持っている学生同士で話し合い、理解し合って、みんなで現状改善のために自己開示し合うグループ・カウンセリングをおこなうことが必要だと考えた。

それぞれの学生個人あてに、グループ・カウンセリングの場所・日時を添えて、次のような日本文のメッセージ・カードを渡した。「これまでの授業に欠席が多かった人たちと一緒に話し合いをしたいと思います。よければ集まって

下さい」

当日の第1回目のグループ・カウンセリングには、9名中8名の学生が定刻に集まった。8名の構成は男性5名、女性3名だった。センターの学生のほぼ8割を占めている東南アジア出身者はいなかった。また、全員が漢字圏出身者ではなかった。その日のグループ・カウンセリングでは、目的を知らせたあとで、できるだけ自由な雰囲気で話し合えるようにした。そして、次回もこのような話し合いに参加したい人は、自由に参加するよう呼びかけて散会した。

第2回目のグループ・カウンセリングに自発的に参加したのは、Aを含む4名の男子学生で、全員サッカーチームに所属していた学生たちであった。「私たちは悪い学生です」と話す学生に、なぜ悪い学生と思うのかと問いかけると「授業に欠席するからです」とむしろ快活に答えた。自発的に集まった男性ばかりの小グループということで、話の内容は自国の教育制度や学習スタイル、日本語の難しさ、将来勉強したい専門分野の話など活発な発言が続いた。ただし、予備教育中の現在の授業をめぐって、いろいろな思い・不安・不満などを共有できていることはうかがえながら、なかなか自分の問題として明確化しにくく、仲間にもカウンセラーにも表現できないようであった。

そこで、4名の学生のうちAと他の2名の学生に個人的にカウンセリング活動を継続することとした（1名は個別カウンセリングを希望しなかった）。

2-4　問題の所在の探索のための第1回目PAC分析

Aに関しては、それまでの面接でラポールも充分ついており、グループ・カウンセリングを通して、授業への欠席の多さに本質的な問題があるが、本人には、それに対する気づきがないことが確認された。しかも、12月に入り、これ以上の欠席は、本人の大学進学にも支障をきたしかねないという緊急性が生じた。

そこで、本人の気づきのきっかけをつくり、言語的カウンセリング以外の方法で、本人に心理的抵抗がない手段が必要となった。PAC分析は自分が書い

た刺激（文・単語）を用いるので進行がスムーズであろうと予測され、コンピュータ通の本人がパソコン出力に興味を示したこともあり、問題の本質を探索するために、“良い授業”のイメージをはかるPAC分析をおこなうこととした。授業については口の重い本人が、授業についてどのようなイメージを持っているのかを話し合うことを通して、授業についての不満や悩みを知ろうとしたのである。実施にあたっては、Aとクラス担当教官にPAC分析の概要と実施目的を事前に説明し、了解を得た。グループ・カウンセリングでは、その表面的な話題に終始しがちだった本人の“授業”についてのイメージを得るため、刺激語は“よい授業”とした。教示は、「あなたにとって“良い授業”のイメージをこたえてください。何語でもかまいません」とした。英語と日本語で本人がやり方を納得いくまで説明した。

PAC分析の実施方法については、内藤（1993 b）の手続きにほぼ従った。また、被験者（クライエント）が外国人であることを充分考慮して実施した。反応ははじめAの母語で記述してもらい、そのあとで英語と日本語の両者で意味の同定をおこなった。本稿では得られた連想イメージを以下のように英語で記す。(＋)(－)(0)は本人が評定した。それぞれ肯定的イメージ、否定的イメージ、中立的イメージを示している。

クラスターの解釈は、図1に基づいて上から順番に各クラスターの項目を読み上げ、群全体から感じるイメージやまとまった理由を質問した。

〈Aによるクラスターの解釈〉

デンドログラム（図1）とMDS[1]によるポジショニング（図2）を見せ、カウンセラーの試案的なクラスター構造の解釈を腹案とした項目群を説明した後、本人にとって良い授業のイメージがいくつのクラスターにまとめられるか尋ねたところ、3つのクラスターにまとまるのではないかと答えた。本人の各クラスター群のイメージとそれについてのコメントは以下の通りである。

クラスター1は“rain”から“good　weather”までの10項目で、outdoor extra activity（戸外課外活動）、というイメージだと解釈した。本人のコメン

【A　第1回目（12-6）の連想イメージ】

(+)　1. new
(+)　2. invention
(+)　3. talk
(+)　4. meeting
(+)　5. new information
(+)　6. time
(+)　7. color(ful)
(+)　8. art
(+)　9. cooperation
(+) 10. 10 book
(+) 11. stationary
(+) 12. help
(−) 13. waiting
(0) 14. neat
(+) 15. some hands
(+) 16. factory
(+) 17. good
(+) 18. laugh
(+) 19. sport
(+) 20. mountain
(+) 21. snow
(+) 22. sunshine
(+) 23. good weather
(+) 24. travel
(0) 25. rain
(+) 26. umbrella
(+) 27. cool
(−) 28. finish

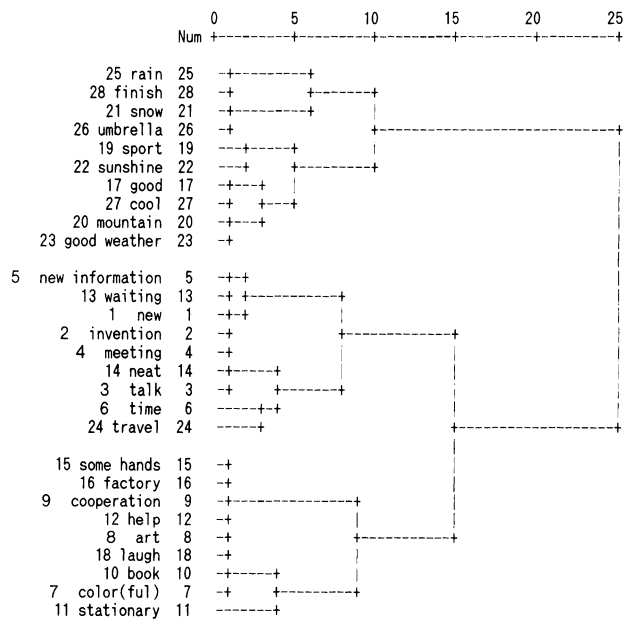

図1　Aの「よい授業」のイメージ（第1回目）：クラスター分析（ウォード法）によるデンドログラム

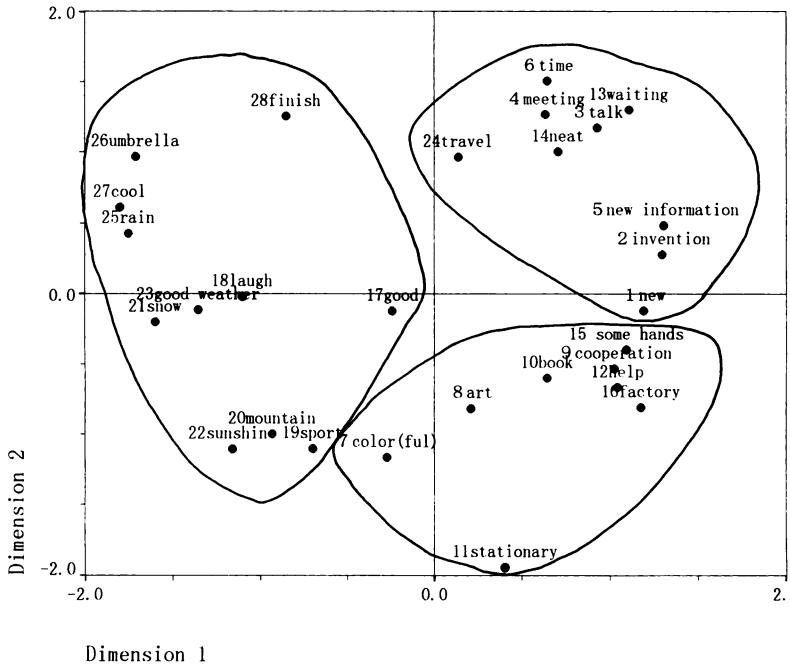

図2　Aの「よい授業」第1回目：MDSによるポジショニング

トとしては、「授業というのはクラスの中だけでおこなうのではなく、いろいろな活動が望まれる。学問は机に座ってだけでなく、それらの活動を通して、あるいはスポーツなど自体も勉強のはずだ」。

クラスター2は“new information”から“travel”の9項目で、まとまったイメージとしては、information（情報）、と解釈した。コメントとしては、「勉強するということは新しい情報を得ることだ。自分にとって新しい情報を得られない授業は良い授業ではない」。

クラスター3は“some hands”から“stationary”の9項目で、まとまったイメージとしては、cooperationと解釈し、適切な日本語は思い当たらないといった。コメントとしては、「クラスが生き生きと活動的で、いろいろな助けを受けて学生が何かを共に学び合う。そんなクラスが好きだ」。

〈クラスターの総合的解釈〉

総合的な解釈に際してまず問題となるのは、いくつのクラスターとみなすかという点であるが、ここではAの解釈やコメントに沿って話し合いを進め、最終的には以下の総合的解釈をおこなった。

Aのまとめた3つのクラスターは妥当なまとまりであると考えられるが、それぞれ2つずつの下位クラスターから成っていると考えられる。

クラスター1については、“rain”から“umbrella”までの雨天と、“sport”から“good weather”までの晴天のクラスターである。これは、Aの望む戸外活動が単に外での活動を意味しているのではなく、それなりの天気、気候にあわせた、あるいは天候に関係のない課外活動全般、むしろ人とともにおこなう活動全般のイメージを表しているのではないかと考えられる。したがって、クラスター1のイメージは課外諸活動と解釈されよう。

クラスター2については、“new information”から“invention”までの情報の希求と、“meeting”から“travel”までの出会いのイメージである。したがって、クラスター2のイメージの解釈は刺激的な出会いであると考えられる。

クラスター3については、“some hands”から“help”までの助け合いの活動と、“art”から“stationary”までの生き生きしたクラスのイメージである。したがって、クラスター3のイメージの解釈は、クラスメイトとの共同活動の楽しさと解釈される。

クラスター2とクラスター3はやがて大きなまとまりとなる。これはAと話し合い“invention”（発見・創造）のイメージだと解釈した。つまり、人との共同活動と新しい情報のある授業を通して、何かを発見できたり、創造できると解釈され、これはクラスター1の課外諸活動とひとつにまとまり、Aの求める良い授業のイメージを形作っていると解釈される。

2-5　PAC分析による治療的効果

AとはPAC分析の実施と解釈の2日にわたって、ゆっくりとした面接時間

をもった。もともとコンピュータに興味を抱いていたこともあり、パソコン処理されたクラスター図による自分の授業イメージの解釈には強い興味を示した。それまで回避されていた「授業欠席」について、ともにクラスターを解釈しあっていくうちに、共通の問題を共有し、むしろ連帯感が生まれた。それとともに、授業に出ないという行為に本人の無意識のメッセージが含まれていたことの気づきが得られ始めた。はじめはAの母語による連想語から出発し、そのあとは英語と日本語をまじえてイメージについて話し合い、授業に対する不満・悩み・不安が顕在化するとともに、いわば言語の壁と文化差をのりこえたクライエントとカウンセラーとのコミュニケーションが成立したといえよう。

また、本人のクラスター解釈とカウンセラーの解釈との差異の点を話し合ううちに、とくに、クラスター2の解釈をめぐって、Aが授業で得たいのは情報だけではなく、本当は友人との共同活動を通した心のつながりを求めているのではないかと問題が明確化されていった。

Aは、その後、何度かのカウンセリングを通して、日本語学習は漢字圏出身者が断然有利であると不満を感じていること、授業場面で幾度も自己評価が下がる経験をしたためクラスメイトが嫌いになったこと、学校外の日本人からの差別経験も日本語学習の意欲を失わせ、学習スタイルが自国と異なることにも必要以上に過敏になっていったこと、自分の価値が日本語の能力だけで判定されているとの思い込みと落胆、いろいろな活動を友人とともにおこないたいのに友人は勉強ばかりしていると悩み続けた自己疎外感や淋しさ、国費留学生であるため自分の行動のすべてが学校から監視されているような束縛感など、来日当初からの自分の思いを語っていった。その時期はちょうど大学学部への進学問題が進行していたが、その相談もあわせておこなううちに、Aはやがて客観的に自分の立場を感じとり始めた。また、自分も漢字圏出身者のことを「チャイニーズ」と呼んで、逆の意味で差別していたようだ、と語った。

2-6　本人の変化を確認するための2回目のPAC分析

翌年1月、新しい年になり3学期を迎えて、進学大学もほぼ本人の希望に沿った形で決定し、Aの表情も明るくなっていった。2月のはじめの面接では、「授業が面白くなってきた」と語った。それを機会にもう一度、Aに授業についてのイメージをPAC分析で話し合ってみることを提案すると快諾した。

今回の手続きも前回と同じであるが、教示はAの日本語のレベルがあがったため、以下のようにして、前回よりもより具体的なイメージを喚起させるようにした。教示に関しては、日本語での説明だけでなく、英語もまじえ、本人が納得するまで説明してから実施した。

教示：「日本の大学で勉学するための予備教育をうけているあなたにとって、このセンターの授業はどのようなものであって欲しいですか？そのイメージをこたえて下さい。そして実際のセンターの授業に対してどのようなイメージを感じていますか？イメージは単語でも文章でもかまいません。20個位までならいくつでも自由に答えて下さい。言葉は何語でもかまいません」。

連想語は前回同様、Aの母語で答えてもらい、後に本人によって英語と日本語の混じった表のような表現に表記しなおした。クラスターの解釈は前回同様にデンドログラム（図3）を見ながら進めた。まず、クラスターは3つと思うが、最終的には2つにまとまるかもしれないと、今回はAも要領よく説明が進んだ。今回の連想イメージの各項目について、項目毎に以下のように説明した。これはAがすすんで行ったことである。その後、本人とカウンセラーで項目の意味の話し合いをじっくりおこなった。

（1）“freedom”：「やっぱり、言いたい事を言ったりしたいことをしたり、したいことが悪かったら自分は分かるから100％フリーダムでなくて、私はこれをしたいけど、悪くないからしてもいい。私はそうするけど日本に来て日本人はあまり、嬉しくないと思った。いつも一生懸命働いて疲れて寝て同じことをする。生活は機械になってしまう。日本人を見るとそういうことを

【A君　第2回目（2・6）の連想イメージ】

1. （＋）freedom
2. （＋）自分で考えてすること
3. （＋）何かしなければならないこと（ギム）
4. （＋）努力
5. （＋）話
6. （＋）friendship
7. （＋）いろいろなことがある
8. （＋）情報
9. （＋）遊び
10. （＋）ディスカッション
11. （＋）connection
12. （＋）先生と学生の関係
13. （＋）グループワーク
14. （＋）ニューハプニング
15. （＋）秘密を守ること
16. （＋）特長（good point）
17. （－）プレッシャー
18. （－）別々なグループになってしまうこと
19. （－）先生は学生をみると学生のことを全部知りたい
20. （0）カルチャー・ディファレンス（culture difference）
21. （－）いつも同じ状態
22. （－）somebody searches inside too much（～したあとでこうやった方がいいという）

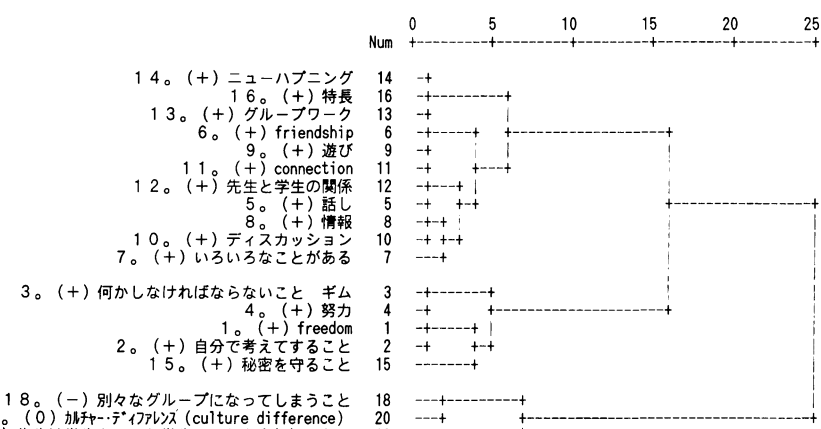

図3　Aの「よい授業」のイメージ（第2回目）：クラスター分析（ウォード法）によるデンドログラム

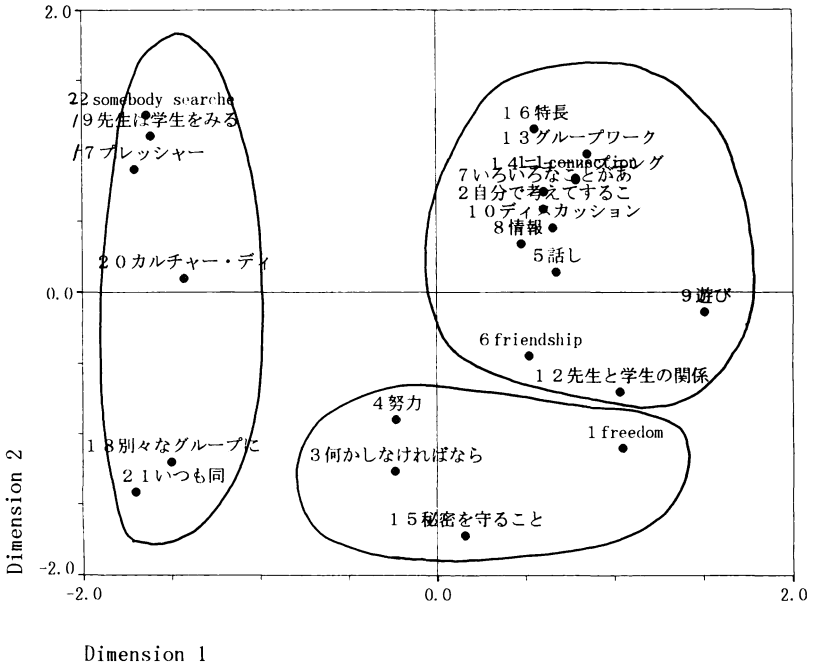

図4　Aの「よい授業」第2回目：MDS[2]によるポジショニング

感じる。自分は日本人のようになりたくない」。

（2）“自分で考えてすること”：「もし、誰かが私に“これは義務ですよ”といわれるのは、好きではないのでやりたくない。自分で考えて、これはやらなければならないと思ったら、それは大好き。いつも親も助けてくれたけど、はじめは自分は自分で考えていったけど、もし正しくないといったら親は話したり、もう一度考えていつもはじめは自分で考えた。親はいつも見ている。もし、失敗に近くなったら、親は私に相談する。これはもう一度話すということ。止めたら理由は分からない。もう一度考えたら大体正しい」。

（3）“何かしなければならないこと”：「誰か私に～ををしなければならないと言ったら嫌だけど、自分でやらなければならないと思ったら嫌なことではない。時々誰か私に言われると時々はいいけど大体は嫌な気がする。自分で

決めさせてくれればいいと思う。宿題のことを言っているのではない」。

（4）“努力”：「自分のために希望のために一生懸命何かをすること。楽しいし、いいことだと思う。自分の決めたことは努力する」。

（5）“話”：「誰かの話を聞いて、意見を聞いて、自分はどこがいいか悪いか分かる。自分の意見をみんなに聞かせる。クラスルームのなか。もっと本で書いたことだけでなく、話を入れたらいいと思っていた。でも、結局は時間がないから余りできないだろう。今はそう思う。私はディスカッションしたり、先生も好きだけど時間はないから、あとでディスカッションになる。はじめの頃はどうして（ディスカッションしない）かなと思ったけど、今は理解できる」。

（6）“friendship”：「これは国のことでなく、いろいろな人、いろいろな国だったら文化とか違うからもっとおもしろいと思う」。

（7）“いろいろなことがある”：「これは説明要らないと思う。悪いことではなく、楽しいとか、いろいろな楽しいこと、楽しくないことでもいろんな事でいいから、いつも同じよりいろいろなことが起きたほうが良いかも知れない」。

（8）“情報”：「：いろんな人とかいろんな所から新しい情報をもらって、いつもアップ・ツー・デイトでいたい。そして学校全体がそんな感じであってほしい。たとえば、大学を選ぶ時、情報がなくて専攻を選ぶのが難しかった」。

（9）“遊び”：「一緒にゲームしたり、話したり、これは遊びだけどこれだけでない」。

(10) “ディスカッション”：「たとえば、このことを話したり、意見を出したりして本当のことを分かるようになる。どっちが本当かを判断したい。どちらも100％本当でないけど、これをミックスしたら本当のことが出てくる。たとえば、戦争の時、自分の国のニュースだけ見ていたけど、今、日本に来て全く違うニュースを聞いた。今、本当のことは何か聞きたい」。

(11) “connection”：「新しい人に会って何かやっぱり新しいフレンドシップ

になる。人だけでなく他の所の情報聞いていろんな所がコネクションあること。今の学校は too close。この学校は外へ出たり、外から遊びに来たりなどない」。

(12)　“先生と学生の関係”：「ここにいると先生と学生はいいフレンドシップになって、先生と学生ではなくて友達みたい。これはいいことだ。いろいろな先生がいるけど大体がフレンドリーでとてもよかった」。

(13)　“グループワーク”：「特長と関係があるが、そういうグループワークは一緒に何かして新しいものが出てくる。これが特長になれば良い。ならなくてもいいけどグループワークはいい。楽しいし、いろんな考えがあるから」。

(14)　“ニューハプニング”：「良いことも悪いこともある。いつも同じでなく新しいことがおこる」。

(15)　“秘密を守る”：「ここは先生たちはいつも話したりするとか。一回授業に出なかったら、翌日には全員がそれを知っているし、その休んだ理由まで知られている」。

(16)　“特長”：「自分のことではなくてたとえば、学校が特長をもっているということ。自分のこともあるけどグループの特長を期待している。たとえば、いろいろな試合に出て、賞を貰ったりすること。今はこの学校の特長は日本語を勉強するだけ。他は何もない。スポーツできるとか。メイン・ゴールでなくて一緒に何かして新しいものがでてくる」。

(17)　“プレッシャー”：「大学のこと。プレッシャーはだんだん大きくなっていくから、これは好きではない。たとえば、大学のことについて、今日は試験、次は発表、次は文部省、大学、面接…というようにだんだんプレッシャーが強くなった。まとめて結果だけ知りたかった」。

(18)　“別々なグループになってしまうこと”：「中国系、ヨーロッパ人、アジア人が別々のグループになってしまった。クローズなフレンドシップがないから、いい感じはしない。はじめから特定の国の友達と話していたからそのまま今まで進んだ。もう、フレンドシップの形はステーブルになった。もう解けない。寂しくはないけどいろいろな友達もいるけど、もし、みんな一緒

だったらいいのではないか。クラスメイトは授業が終わったら自分のグループに戻る。自分もそうだ」。

(19)　“先生は学生をみると学生のことは全部知りたい”：「いい点もあるし、悪い点もある。悪い点の方が強い。やっぱり先生は悪いことをしたくないけど、無意識にする。」

(20)　“カルチャー・ディファレンス”：「時々、いい点もあるし、良くない点もある。どっちが強いか分からない。時々、楽しい、時々楽しくない。挨拶するときとかにそれを感じる。日本に来た時、距離を感じた。でも、今は逆に日本のカルチャーに慣れてきた。この前、自分の国の大使館に行ったが、大使が別れる時に握手したりしたけど、ちょっとびっくりしてしまった。それは自分の国のやり方だと感じた」。

(21)　“いつも同じ状態”：「変化がなく、楽しくない。もし、いつも同じ状態だったら創造できない。これはいやなこと」。

(22)　“somebody searches inside too much”：「会う時はいつもリラックスしなくて、この人は本当はどんな人でしょうか？とみんな知りたいと思う。自分が留学生だから関心をもたれるのかもしれない。やりすぎるとちょっと。大体私が日本人に会う時は、リラックスして質問してくる」。

〈Aによるクラスターの解釈〉

クラスター1は“ニューハプニング”から、“いろいろなことがある”までの11項目で、variety のイメージだと解釈した。これに対して、ディスカッションしたり、話したりすることは楽しい。一緒に遊ぶことでフレンドシップができる」とコメントした。

クラスター2は“何かしなければならないこと”から“秘密を守る”までの5項目で、hope のイメージだと解釈した。これに対して、「自分で考えてやった方が自由。これを守ってあげなければいけない」とコメントした。

クラスター3は“別々なグループになってしまうこと”から“いつも同じ状態”の6項目で、brotherhood のイメージだと解釈した。これに対して、「外

人とかではなく、みんな地球人で同じ。みんな同じだから別々のグループになって、ある人の中を知りたいとかする必要はない。みんな同じだから」とコメントした。

また、クラスター1とクラスター2のイメージは合わさって、futureのイメージになると語った。

〈クラスターの総合的解釈〉

総合的な解釈に際しては、かなりはっきりと3つのクラスターのまとまりが認められる。そして、それがAのいうように2つの大きなクラスターのまとまりを形成している。Aの各連想項目の意味づけを追いながら話し合いを進め、最終的に、以下のような総合的解釈をおこなった。

クラスター1については、第1回目のPAC分析では、outdoor extra activityとしてまとまっていたイメージであろう。前回では人との課外諸活動のイメージに出会いの要素がより強まり、情報が加わって一つのまとまったクラスターになっている。したがって、クラスター1のイメージは、刺激的出会いのある諸活動のイメージと解釈される。つまり、前回のクラスター1とクラスター2が一緒にまとまり今回のクラスター1のイメージとなっていることがわかる。しかも、その活動の意味するものがより具体的、建設的であることが連想項目からうかがえる。

クラスター2については、第1回目のPAC分析では、情報としてまとまっていたものであろう。今回は、Aのhopeとして命名されているように、本人の本来希望する自発的な勉学の態度のイメージが新たに加わったと解釈される。

クラスター3については、第1回目のPAC分析では、cooperationというイメージに相当している。Aは今回はこれに、より広い、高い次元のbrotherhoodのイメージを答えているが、これは、内容的には、これまでの授業（教育環境）に対する不満とそれを乗り越えた現在の気持ちである連帯のイメージを表していると思われる。このクラスター3はクラスター1とクラスター2のまとまりであるfutureとつながっていく点にAの成長がうかがえる。

2-7　まとめ

2回にわたっておこなったPAC分析の結果については、2つのデンドログラムを比較しながら2人で検討した。Aは2回目の結果で、自分で名付けたhopeやfutureのイメージについて「少し未来が見えてきたから」と、満足気に説明した。そして、以下のように語った。

〈1学期・2学期の授業をふりかえって本人のコメント＝自分なりの総括〉

「1学期、2学期は授業は楽しくなかった。いつも同じ状態だったから、また今日も同じことをやると思ったから。良い点もあるし、悪い点もあるけど、自分にとっては良い点は時々だった。waste of timeの感じがしていた。分かる所は分かるから、分からない所は自分で考えて友達とディスカッションしたりすると分かる。自分の好きなやり方でするからいいかもしれない。自分の好きなやり方というのは、varietyということ。中国系の中には、いないけれど、やっぱり多分他の人もいるかも知れない。ある人は書いてあることだけを勉強したいかもしれない。1学期が終わったらクラスを変えたりしてほしい。もっと他の人の気持が分かるようになるから。クラスメイトとは合わなかった。合う人と一緒に勉強したかった。でも実際には無理だということも今はよく分かる。3学期になって、いろいろな講義も増えたし、専門の理科系の実験などもやるし、楽しくなった。それが理解できるのは日本語を2学期まで勉強したからだと今は思う。2学期まではfutureは見えなかったが今は少し見える。友達のことについても、もっと文化の違いがあっても一緒に過ごせば良かったと思う。これからはそうしたい」。

その後、自分の興味があることがあると、授業よりそちらに行動してしまう傾向はあるものの、センターのパンフレット作成に際し、得意のイラストで協力するなど積極的な態度を取り戻した。

3　考　察

3-1　A のカウンセリングの評価：PAC 分析の意義を中心に

2 回目の PAC 分析を機会に、A のカウンセリングはほぼ終結を迎えたといえよう。はじめは自分が同性愛者と思われたことのショックを訴えて来室した A であるが、実は、日本という異文化状況において自己の文化的アイデンティティがゆらぎ、不安が強まっていったものと考えられる。本人は、授業を欠席するという行為でその時の不安定な気持を表現していたのかもしれない。カウンセラーとしては、そのことを面接場面と同じように授業の欠席の多い学生たちとのグループ・カウンセリングを通して確認できたが、言語的な障壁もあり、本人の問題の明確化には至っていなかった。また、本人は国費留学生という立場から、いわゆるスクールカウンセラーである第一著者と自分の授業の欠席の問題について語ることは回避していたものと考えられる。

本人の気づきのきっかけ作りとしておこなった PAC 分析はこのカベを破った。言語的カウンセリングと違って本人に心理的抵抗がなく、母語で書いた反応語により本人の考えがよく表現できたこと、また、コンピュータ通の本人が PAC 分析を気に入った、などの理由で A の“良い授業”のイメージをはかる PAC 分析をきっかけとして、A への個別カウンセリングは良い終結を迎えたものといえる。

第 1 回目の PAC 分析のクラスター分析結果の話し合いを通して、A は授業の欠席に関しての自分の思いをカウンセラーに率直に語れるようになった。とくに、第 1 回目のクラスター 1 の extra activity に表されたイメージは、A がその時に求められている勉学の態度からの逃避的態度を表しているのではないかということを話し合えた。

引き続くカウンセリングにおいて、本当に自分が求めているのは、単なる情報というものではなく、クラスメイトなどとの共同活動を通した人間としての

心のふれあいや出会いなのではないかという思いを素直に認められるようになった。また、日本語学習には漢字圏出身者が有利であるとの不満感を自分の無意識の文化的差別感と関連づけていくまで変化した。

第2回目のPAC分析は、授業に対する態度の変化が認められてきたAの了解を得ておこなった。この2回目のPAC分析のクラスターの解釈の作業は本人が4月の来日以来抱えてきた適応上の心理的問題を振り返る絶好の機会となったといえよう。

Aはコンピュータに興味のある青年で、PAC分析の出力（樹状図とMDS）にその点からの興味を示したことが、カウンセリングにプラスとなった。本人のPAC分析の手続きに対する興味が、Aの意味的世界や価値観の理解とカウンセラーへの自己開示を促進させた。本人にとっては、自己の不満等の理解や異なった価値観の存在への気づき、カウンセラーにとってはAの意味的世界への急速な洞察への道を開いたといえる。

このことはコンピュータに興味のある事例のみにPAC分析の効果があると示しているわけではない。PAC分析の効果は、被験者がコンピュータへの興味がない場合にも、（出力結果を得るまでの手続きはともかく）出力結果の内容に大いに興味を示し、カウンセリングの導入と展開の手段として有効であったことが他の事例（未発表）で明らかになっている。従って、コンピュータへの興味がクライエントに無くてもPAC分析は有効なカウンセリング技法であるといえる。

3-2　異文化間臨床心理学の技法としてのPAC分析

内藤（1993 a）はPAC分析の治療的側面について以下の（3-1）から（3-13）までの13点の治療的効果を指摘している。筆者らの今回の試みから、ここではPAC分析を異文化間臨床心理学における技法という観点から、内藤（1993 a）の説明を順に紹介し、各々についてコメントを行っていこう。

(3-1)　被験者自身が連想し、項目間の類似度を評定した結果に基づいて、パソコンによって析出する。このようにして得られたデータの解釈という自己からいったん切り離し客観視させる形で、被験者自身によって「明確化」という作業が遂行される。このため明確化の抵抗が少ない。

Aの事例から示されるように特に留学生の場合は、類似度の結果がグラフィックに表現されていることに対する興味を示すものもいた。クライエント自身による「明確化」を進める上で、有効な方法である。

(3-2)　連想項目は被験者の使い慣れた、独特なニュアンスをもつものから構成されているので、被験者の解釈（明確化）が容易である。

留学生自身が表現した母語ないし英語・日本語という本人の希望言語により、反応語の分類されたものを解釈するため、日本語のレベルが低いクライエントでも解釈が可能である。

(3-3)　項目は、自由連想によって得られているので、無意識（少なくとも前意識）まで踏み込んだ構造を解釈（明確化）させることになる。

このような明確化は、異文化間カウンセリングの過程では、なかなか成立しない場合がある。カウンセリング技法の一環としてPAC分析をとらえることで異文化間カウンセリングの新しい地平が開けるであろう。

(3-4)　フォーカシングの技法では、構造にぴったりする「言葉」が発見されるまで次々と連想し、不要とされたものは捨てていく。これに対し、PAC分析では、クラスターを構成する項目群全体を使って、それらが共通に指し示す方向にあるものを探るので、発見（解釈）が容易である。

視覚的な方法で個人のイメージや態度の構造が明確になるので、解釈が比較的に容易である。フォーカシング技法を用いた場面では、「文化」が焦点化を妨げている場合もあり（Ivey, 1983/1985, p 112)、異文化間カウンセリングがなかなか進まないことがよくある。この点ではPAC分析の方法は明快である。

(3-5)　解釈を被験者自身にさせることは、被験者に問題から逃げ出さないで直面させることになる。

この点では、PAC分析の無原則的な導入の危険性も一方で考慮しながら、異文化間カウンセリングの強力な技法として、有効である。

(3-6)　解釈の内容を治療者に表明させることは、社会的（対人）関係の中で問題を考えさせることになる。

異文化間カウンセリングでは、カウンセラーにとってはなじみがあるがクライエントにとっては不自由にしか操れない音声言語のみを媒介手段とする方法では、しばしばコミュニケーションの停滞・断絶や誤解、不自由なコミュニケーション自体が不快な感情・雰囲気をもたらすという問題がある。

留学生と日本人カウンセラーが、留学生が書くことによって表現したコトバ（クライエント自身の文字言語）と、デンドログラムや平面配置図（視覚的＝非言語的記号）と、2者が共有する音声言語の3つの記号モードを使用して、多面的に「媒介された行為」(Wertsch, 1991/1995) として、意志疎通を重ねていくことになる。

(3-7)　治療者（他者）へ報告することは、問題にコミットさせることになり、問題への意識を高め、治療への意欲をもたせることになる。

実験協力という形で、留学生を不自然な形でなくカウンセリングの場へ誘うことができる。Aの事例にみたようにPAC分析の過程を通して問題を発見し、再考しそのことが問題解決や治療効果につながっていくことが期待される。

(3-8)　被験者が自身の解釈を治療者へ表明することは、データの解釈の報告という自然な形で、被験者と治療者が問題への理解を共有することになる。

これはさりげない形での、カウンセリング・プロセスである。最初留学生は研究者の研究への「協力者」としてPAC分析を受ける場合もある。しかしこ

のプロセスの中で両者が問題についての共通認識と感情の共有を進めることにもなるのである。留学生の中には、カウンセリングを受けることに強い心理的抵抗を示す文化圏からの出身者もいる。この点でもPAC分析は異文化間カウンセリングの技法として有効である。

(3-9)　治療者は、被験者の内的世界に関する情報を、カウンセリングなどと比較すると、著しく短時間のうちに収集できる。また、これに基づいて治療の手がかりを得ることができる。

この点は異文化間カウンセリングのみならずカウンセリング一般にも適用できる利点である。とくに相手が異なる文化を背景にしている場合、すばやく的確な問題の把握は重要である。

(3-10)　被験者自身の問題構造の理解を共有するという形で、治療者一被験者の治療的人間関係を構築できる。(治療者へのイメージや治療者との関係について、また被験者へのイメージや被験者との関係について、被験者および治療者のそれぞれの自由連想をPAC分析すれば、治療的関係の分析すら可能である。)

治療者への報告と解釈についての討論を通してクライエントはカウンセラーに対し自己開示をしていく。両者の共通理解に基づいた信頼関係の発展が文化差や言語の問題の困難を越えて、問題解決にまで進んでいくのである。

(3-11)　連想項目には具体的な対象や行動が含まれているので、治療目標の設定や行動変容のプログラム作成が容易である。

留学生を対象とするカウンセリングの重要な目標は、本人が問題とそれに対する自分の姿に気づくことである。連想項目をカウンセラーと対話しながら分析することにより、そのような過程が自然に生まれる。

(3-12)　治療効果の判定のために測定を繰り返す場合には、構造の質的変化を

分析できる。つまり、治療による質的変化を連続的に分析するのに有効である。

本章では、縦断的にPAC分析のデータを採集することにより、カウンセラーとの関わりを通してのクライエントの変化について考察している。

(3-13)　被験者が単独で分析することも可能である。繰り返し測定することで、自己への治療的試みの効果を検討することもできる。これは、セルフ・（ヘルプ・）カウンセリングの強力な技法として活用できることを意味する。

カウンセラー自身が、異文化に対する偏見や、自文化中心主義に気づくことが異文化カウンセリングではきわめて重要である。その気づきの手段としてPAC分析を応用することができる。

以上、指摘されている点を考察すると異文化間カウンセリングへのPAC分析の適用はきわめて効果的であるといえる。

3-3　異文化間カウンセリングにおける非言語的技法としてのPAC分析の有効性

鈴木・井上（第2章）は、留学生などを対象とする異文化間カウンセリングの非言語的技法の5つの特徴を列挙している。この5つに沿ってPAC分析の有用性について考察してみよう。

1）　クライエントの内的表現を援助する

PAC分析では、その場の対話的場面で直接的に媒介言語で表現させるという圧力を感じさせずに、クライエントの表現を引き出すことができる。書字言語の反応であり本人のペースで表現が可能である。

結果の解釈については、本人が出した反応語に基づいているので表現が引き出しやすい。異文化間カウンセラーにとっては、媒介言語の制約を大きく超え

た、このような有用な方法を用いることが、クライエント理解につながるのである。

2）　治療的効果がある

PAC分析は、クライエントの積極的な参加とカウンセラーとの対話により治療過程の一部として用いることができる。異文化間カウンセリングで問題になる、言語的制約と文化の違いからくる相互理解の難しさを乗り越えるうえで、すでに記述したようにPAC分析の長所があり治療に有益である。

3）　人間関係の形成を促進する

カウンセリングはカウンセラーとクライエントとの共同の活動とコミュニケーションによって成り立っている。カウンセラーやカウンセリングそのものにクライエントが抵抗を持たないことが大切である。この点では、Aの事例では、カウンセリングの導入に際して、PAC分析が、自然にその中に引き入れる役割を果たしていた。彼がコンピュータに興味があり、PAC分析の出力であるデンドログラムや多次元尺度法の2次元配置図に強い関心がわいたという特殊事情もあるだろう。しかし、異文化間カウンセリングでは言語刺激だけの相互交渉は媒介言語の制約から難しい場合が多い。この点でグラフィックな図表の出力を媒介として勧めるPAC分析は、遊び的要素もあり、「箱庭療法」や「コラージュ療法」等と同じく、異文化間カウンセリングに導入が有効であろう。

4）　自己援助機能を開発する

PAC分析は、認知療法的な側面がある。すなわち、クライエントに自分の態度やイメージの構造を解釈してもらうことにより、自らの気づきによって治療的効果が期待できるものなのである。このような気づきによる心的世界の再体制化により、本人の発達（development＝開発）へとつながっていく。異文化状況の下で、自分づくりをする課題を背負った人を対象とする異文化間カウ

ンセリングにとって、問題行動の解決だけでなく、今後の問題の再発予防と本人の人格発達を援助する方法としてPAC分析は有効である。

5）心理アセスメントができる

PAC分析は、もともと個人の態度・イメージの内的構造を明らかにするために開発された測定方法であり、臨床場面への適用はその応用方法の一つにすぎない。また、本人の気づかない内的世界を解釈するという点では、投影法との共通性も見られる。しかし、PAC分析での「解釈」の決定は、イメージの持ち主本人である被験者と研究者との相互作用によっている。この点で、PAC分析は、クライエントの立場を考慮した測定法であろう。

これらの5つの特徴からPAC分析は異文化間カウンセリングにおける有効な「非言語的技法」の1つであると言える。ただし個人内のイメージの表現を言語という媒介手段を使用する点で、箱庭やコラージュで直接視覚的にイメージを表現する方法よりは「非言語的」な度合いは相対的に弱いと言えよう。

4　まとめ：発達援助におけるPAC分析の意義と可能性

本研究は、カウンセラーとクライエントとのカウンセリング過程においてPAC分析を応用した初めての試みとして意義が大きい。まとめると、以下の10点にわたる効果が見られたと整理できる。

（1）　カウンセリングへの心理的抵抗を低減し動機を高める
（2）　当面する問題の明確化
（3）　自己開示の促進
（4）　問題への共同活動による共有知識的理解の深まり
（5）　共通話題によるコミュニケーションの発展
（6）　カウンセラーとクライエントの2者の共同活動による信頼感の深まり

(7)　自己理解と他者理解の促進
(8)　カウンセラー側の気づきのきっかけ
(9)　関係者へのコンサルテーションの客観的資料としての樹形図の有用性
(10)　クライエントの「意味」の気づきによる発達的変化

(10)について付言すると、本研究は、クライエントの「意味」(Ivey, 1994；Pedersen & Ivey, 1993) のレベルにおける理解が、PAC分析を用いると、より早期に深い形で実現できるという可能性を示したと言える。カウンセラーにとっても文化的背景の違いをのりこえて個としてのクライエントの理解 (Allport, 1942　大場訳　1970；Ridley, 1995) をおこなう手段として有効であった。また、クライエントだけでなく、カウンセラーの「気づき」を促進するという「発達の相互性」の観点 (Erikson, 1964/1971：本書第1章参照) からみても、異文化間カウンセリングだけでなく、広くカウンセリング一般への今後の活用が期待される。　**(井上孝代・伊藤武彦)**

【注】

(1)第1回目のMDSは、ストレス (Kruskalの公式1) が.278、決定係数が.656であった。これは全体の項目の類似度の関係の約66%を、2次元平面の距離の関係で表現できたことを示している。
(2)第2回目のMDSは、ストレス (Kruskalの公式1) が.213、決定係数が.753であった。これは全体の項目の類似度の関係の約75%を、2次元平面の距離の関係で表現できたことを示している。

【謝辞】

この論文をまとめるにあたり、PAC分析に関して、創案者である信州大学人文学部の内藤哲雄氏に、その理論的基礎と技法についてきわめて重要なご指導とご示唆を賜りました。ここに記して深く感謝するものです。

【引用・参考文献】

オールポート、G. W.　大場安則訳　1970 『心理科学における個人的記録の利用法』培風館（Allport, G. W. 1942 *The use of personal documents in psychological science. New York:* Social Science Research Council）

Erikson 1964 *Insight and responsibility.* Norton（鑪　幹八郎　訳　1971 『洞察と責任：精神分析の臨床と倫理』誠信書房）

藤田裕子・佐藤友則　1995 「日本語教育は教育観をどのように変えるか」『平成7年度日本語教育学会春季大会予稿集』180-185.

井上孝代・土屋順一・谷　和明　1996 「国費学部留学生の退学とその要因：『国費学部留学生に関する調査報告』をふまえての一考察」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』**22**、193-208。

Ivey, A. E. 1983/94 *Intentional interviewing and counseling: Facilitating client development in a multicultural society.* (3rd. ed, 1994) Pacific Grove, CA: Brooks/Cole Publishing Company. 福原真知子・椙山喜代子・國分久子・楡木満生訳　1985 『マイクロカウンセリング』川島書店（特に第9章）

村瀬孝雄　1965 「カウンセリングにおける診断の問題」誠信書房（編）『カウンセリングの展望』誠信書房、pp 20-51。

内藤哲雄　1993 a 「個人別態度構造の分析について」『信州大学人文学部人文科学論集』**27**、43-69。

内藤哲雄　1993 b 「学級風土の事例記述的クラスター分析」『実験社会心理学研究』**33(2)**、111-121。

内藤哲雄　1994 a 「個人特有の態度構造を測る：態度の心理学」浅井邦二（編）『こころの測定法：心理学における測定の方法と課題』実務教育出版、172-193。

内藤哲雄　1994 b 「性の欲求と行動の個人別態度構造分析」『実験社会心理学研究』**34(2)**、129-140。

内藤哲雄　1994 c 「内陸地域『信州』のイメージの個人別構造分析」信州大学人文学部特定研究研究班『内陸地域文化の人文学的研究 I』特定研究最終報告書、27-47。

内藤哲雄　1995 a 「『信州人の人間関係』の個人別イメージ構造分析」信州大学人文学部特定研究研究班『内陸地域文化の人文学的研究 II』特定研究最終報告書、5-26。

内藤哲雄　1995 b 『個人別態度構造に関する研究』平成6年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書

内藤哲雄　『PAC分析実施法入門』ナカニシヤ出版

Pedersen, P. B., & Ivey, A. 1993. *Culture-centered counseling and interviewing skills: A practical guide.* Newbury Park: Praeger.

Ridley, C. R. 1995. *Overcoming unintentional racism in counseling and therapy: A practitioner's guide to intentional intervention.* Thousand Oaks, CA: Sage.

Shepard, R. N., Romney, A. K., and Nerlove, S. B. 1972 *Multidimensional scaling: Theory and applications in the behavioral sciences. Vol.1: Theory. New York, NY:* Seminar Press.岡太彬訓・渡邊恵子訳　1976『多次元尺度構成法：MDS』共立出版

高根芳雄　1980　『多次元尺度法』東京大学出版会

東京外国語大学留学生日本語教育センター生活指導部　1995　『国費学部留学生に関する調査報告』東京外国語大学留学生日本語教育センター

渡辺文夫・安龍洙・内藤哲夫　1995　「韓国人日本語学習者と日本人教師の授業観の比較」『日本社会心理学会第36回大会発表論文集』360-363。

Wertsch, J. V. 1991 *Voices of the mind: A sociocultural approach to mediated action.* Cambridge, MA: Harvard University Press　田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子訳　1995　『心の声：媒介された行為への社会文化的アプローチ』福村出版